

「環境と人間」プロジェクト研究報告

A Report of 'Environment and Human being' Research Project

水・気候変動問題を中心に創る大陸間SDGs教育 —パリ地球子ども広場公演から世界へ—

Intercontinental Education for SDGs about the problem of water and climate change
—From Global Kids Square in Paris to World—

梶山女学園大学教育学部教授

宇土 泰寛

Yasuhiro Uto

梶山女学園大学教育学部准教授

渡邊 康

Ko Watanabe

梶山女学園大学教育学部客員教授

林 敏博

Toshihiro Hayashi

岡崎市立生平小学校教頭

山本 典弘

Norihiro Yamamoto

はじめに

世界各地で、異常気象が頻発し、猛威を振るっている。2020年1月、オーストラリアで、大規模な森林火災が発生し、日本の本州の半分と同じ面積が焼き尽くされ、同時に、保水力をなくしてしまった大地で大洪水が発生し、都市機能がマヒしている。さらに、ニューサウスウェールズ州の内陸部では、大きな砂嵐が発生し、住宅を飲み込んでいる。この事態は、10年後、このまま地球温暖化が進むと全世界的な規模でこのような事態が頻発し、さらに、海に面した国では海面上昇の脅威にさらされるのである。また、食糧問題にも大きな影響が出てくる。今、地球温暖化や気候変動と言っていたことが、世界的には「気候危機 (Climate Crisis)」と呼ばれる事態に

なっている。この2020年は、地球の分岐点と言われる2030年までの10年をどのように人類として過ごすかに関わっている重要な年である。SDGs (持続可能な開発目標) が各国を越えて、グローバルガバナンスとして提起され、決定されたことは、極めて新たな地球時代に突入したことを意味している。

梶山人間学研究センターの「環境と人間プロジェクト」の役割はますます重要なものになってきており、単なる研究から、地球的な規模での探究と世界各地と連携しながら、何らかのactionを引き起こすことが重要である。

このような事態に対して、2019年は、「環境と人間プロジェクト」にとっても極めて大きな1年であった。

2019年3月末、大陸間水・気候変動プロ

プロジェクトとして日本・フランス・ブルキナファソの子どもたちが、アジア・ヨーロッパ・アフリカの3つの大陸を越えて、地球子ども広場 (Global Kids Square) 活動の一環として、フランスに集結し、パリ公演を行い、世界の気候変動問題に対して「パリ子ども宣言」を発した。

次に、これらの活動を、日本の研究者、学校関係者に、6月の日本国際理解教育学会を椋山女学園大学で開催し、中国・韓国・タイなど海外からの参加者も含めて、公開シンポジウムで広めた。8月には、北海道の旭川で開かれた全国海外子女教育国際理解教育研究協議会 (全海研) の全国大会に参加し、11月には、東海ブロック国際理解教育研究大会を椋山女学園大学で開催し、多くの先生方に広めることができた。

これらの活動には、この活動の全体的な方向付けと組織的対応、活動内容の研究が必要である。今年度、「環境と人間プロジェクト」の活動として、環境と人間プロジェクト研究員を中心に、定期的に、「大陸間SDGs教育研究会」を開催した。その場所として、本学EX棟207号室を研究の拠点にして、定期的に開催したのである。

また、ここでは、従来、UR団地との提携活動として実施していたジオラマを使ったSDGs教育は解体処分の危機に陥っていたが、この207号室に半分の大きさにして移管して、椋山こども園の子どもたちの参加によって、学び合いを継続することができた。さらに、高学年用のジオラマ作成を行った。ここには、水・気候変動教育、そしてモビリティ・マネジメント教育の要素が掛けられている。さらに、外国人児童や特別支援の子

どもたちへの学びも言語コードを遡減することによって、可能とする新たな学び論の教育的研究もしかけられている。

国内の活動は、宇土ゼミを中心に、岡崎市立生平小学校への出前授業の第3弾も行った。

これらの国内の活動を踏まえて、「パリ子ども宣言」を大陸を越えて広めるために、9月にブラジル、10月にマレーシアに行き、現地校や日本人学校の訪問、現地調査等を行い、問題の共有を図った。この2月に、これらの活動の報告と2020年度の活動方針を議論するために、ヨーロッパを訪問した。

このように日本の国内、椋山女学園での活動、そして、世界での活動など、これまでの活動の継続と拡大を図ってきた。この経過と内容を以下の章で具体的に報告する。

1 環境と人間プロジェクトの活動概要と経過

1.1 環境と人間プロジェクト活動の概要

(1) 地球子ども広場 (GKS : Global Kids Square) 活動 活動場所 EX棟207号室

①ジオラマ (プラレール) を使った地球子ども広場活動

ジオラマを使った活動プログラム / 椋山こども園の園児と学生

②ジオラマ (Nゲージ) を使った地球子ども広場活動

ジオラマの物語化 → 絵本・インスタグラム → 多言語化 ⇒ 海外へ
地球子ども広場プロジェクトメンバー
大学2年生～4年生

③新美南吉の物語とSDGs教育としてのモビリティ・マネジメント教育

新美南吉の物語 → 新たなSDGsとの

関わり → 海外の交流校などへ紹介

- ④出前授業のプログラム開発と教育実践
シリーズ第3弾「100年後の地球の物語」
宇土ゼミ4年生
情意・認知・価値・技能の4つの側面論
でのプログラム開発

越知日伯学園

アジア：フィリピン、マレーシア

日本・愛知県岡崎市立生平小学校

(2) 大陸間SDGs教育研究活動～大陸間水・
気候変動教育と地球子ども広場活動を中心
に～

大陸間SDGs教育研究会

月1回 18:30～20:30 EX棟207号室

- ①研究活動テーマ：
「大陸を越えた学び合いによるSDGsと
しての水・気候変動教育の創出」
- ②椋山人間学研究センターの「環境と人間
プロジェクト」の研究活動
メンバー：椋山人間学研究センターの環
境と人間プロジェクト研究員、
大陸間教育プロジェクト「地
球子ども広場 (Global Kids
Square)」、国際理解教育学
会名古屋チーム等のメンバー
- ③環境と人間プロジェクト研究員
宇土泰寛、渡邊康、林敏博、山本典弘、
天野幸輔、中村眞子、野崎健太郎、川
野幸彦

(3) 大陸を越えた海外の学校等とのネット
ワークづくりと交流活動

ヨーロッパ：フランス・アルザス地方
ストラスブル市

アフリカ：ブルキナファソ・ワガドゥグー
市 ル・クルーゼ学園

南アメリカ：ブラジル・ベレン市

- (4) 広報活動 「椋山 大陸間SDGs教育」
プロジェクト+フェイスブック・インスタ
グラム、椋山女学園大学HPなど

1.2 大陸間水・気候変動教育と地球子ども
広場活動の経緯

地球子ども広場パリ公演に向けた今までの
取り組みとその後の展開について

- ①椋山女学園大学附属小学校が、ブルキナ
ファソへ、2010年に机といすを寄贈
ル・クルーゼ学園小学校との交流が始ま
り、大陸を越えた水プロジェクト開始
- ②2015年 日本・フランス・ブルキナファ
ソの子どもたちによる合唱
水の学び合いを通した3か国の合唱「I
LOVE WATER」を椋山女学園大学で発表
- ③2016年 大陸間ミュージカル「I LOVE
WATER～人と水の精の物語」
ブルキナファソの児童と教師を招聘し、
日本とブルキナファソの子どもたちによる
合同のミュージカル「I LOVE WATER～
人と水の精の物語」を名古屋で上演、パリ
協定を受けて、気候変動問題を加え、フラ
ンスの子どもたちも映像で出演
- ④大学（宇土ゼミ）と企業（アサヒ飲料）が
連携し、小学校への出前授業を実施
2017年度の1回目は、日常的な自然と
社会の循環についての「水と森の物語」を、
2018年度の2回目は日本も含めて世界的
に起こっている「異常気象の物語」を作成
し、小学校でのSDGsの教育を水と気候変

動をテーマに実施した。この物語から生まれた関心を理科的な過実験や土砂崩れをジオラマで実際に引き起こしたり、個々の行為が地球温暖化につながり、異常な積乱雲や台風が発生する現象になったりすることの「見える化」を図った。さらに、自らの価値観や日常的な生活を問い直し、実際にどのような行動をしたらよいかをゲームを通して学べるプログラムを開発してきた。

この出前授業の手法は、新しいカリキュラムマネジメントのプロジェクト学習でもあり、大きな成果を引き起こし、実際に様々な災害に対する防災教育にもなっている。

この出前授業が生平小学校のSDGs教育導入の契機になり、子どもたち自身が主体的な活動を行った。2019年度は、現在生きている人々がどのように行動するかを問う「100年後の地球の物語」を実施した。手法も、クロマキーの映像を使うなどこの3年間で大きな進歩があった。

⑤地域にある団地（UR）と連携した持続可能なまちづくりをジオラマで実施

ジオラマの作成と様々な気候変動によって引き起こされる事態に対応する活動を実施した。言語コードを遁減し、多様な子どもたちとの学び合いによる市民性の育成を図った。これらのプロジェクト型の新たな試みが、いろいろな自治体から関心をもたれた。しかし、URと大学の提携が終了し、この団地プロジェクトも、2019年5月16日に、最後の会を実施した。

⑥2019年 パリ地球子ども広場（Global Kids Square in PARIS）公演を実施

2019年3月30日 16時~18時に、パリ日本文化会館の地上階小ホールで、日本語

とフランス語による地球子ども広場のパリ公演を、笹川日仏財団、パリ日本文化会館の共催を得て実施した。サイバー空間「地球子ども広場」上で「水と気候変動問題」に関してこれまで学んで来た成果を日本、フランス、ブルキナファソ3か国の子どもたちが直接会い、各国の取り組みについて歌と身体表現や映像を取り入れた発表会と意見交換を行い、「パリ子ども宣言」を創った。

⑦パリ公演の成果を学会と全海研全国大会、東海ブロック国際理解教育研究大会で公表

2019年6月に、日本国際理解教育学会（会場 椋山女学園大学）の公開国際シンポジウムで、フランスとブルキナファソから2人を招聘し、3か国のメンバーで実施した。11月には、東海ブロック国際理解教育研究大会（会場 椋山女学園大学）で国際教育交流とシンポジウムを実施し、多くの学校の先生方に公表した。

⑧パリ子ども宣言を世界に広げる

2019年9月に、ブラジルを訪問し、SDGs教育のモビリティ・マネジメントに関わるクリチバ市を訪問、続いてサンパウロ日本人学校と現地校、リオデジャネイロ日本人学校と現地校を訪問し、講演を行った。さらに、世界的に注目されているアマゾン川の河口に位置するベレン市に行き、現地校や日系社会の中心になっている日系人の協会や日系人の方々とお会いした。そして、日系の現地校である越智日伯学園と交流することになった。

10月には、マレーシアのパナン島を訪問し、パナン日本人学校と椋山女学園大学の国際交流提携大学であるマレーシア科学

大学を訪問した。また、ベナン島の歴史や現在の問題を調査した。

2 パリ地球子ども広場 (Global Kids Square in PARIS) 公演

2.1 パリ地球子ども広場に向けて

(1) 日仏の学校を核にしたSDGsとしての地球社会の未来づくりへ

日仏の初等教育では、未来に向けてたいへん意義のある実践がなされているにも関わらず、交流があまり行われておらず、この度の未来の地球社会、地域社会に大きな影響を及ぼす国連のSDGsとパリ協定を共通課題として、日仏が核になりながら、大陸を越えて、ブルキナファソ等ともネットワークをつくり、地球社会の未来づくりに向けて、本プロジェクトは活動を行っている。この活動に対して、パリ日本文化会館からお誘いがあり、2019年3月30日、パリ日本文化会館で「地球子ども広場での大陸を越えた学び合いと公演」を実施することになった。

(2) 地球子ども広場パリ公演の内容に向けた取り組み

フランス事前打ち合わせ会議

12月18日 (火)、パリ

フランス会議参加者

日本：林敏博・岡崎ますみ・ばんたくや

フランス：

Ecole Stoskopf in Strasbourg

Mr. Roisin Gilles

ブルキナファソ：

Le Creuset Plus ル・クルーゼ学園

カトリーヌ・ザカネ理事長

会議議題

① Global Kids Square : GKS プロジェクトリーダー挨拶

梶山女学園大学教授 学部長 宇土泰寛のメッセージを代読

② 2018年2月フランス会議での決定事項の確認

1) ブルキナファソ、フランス、日本での実践

Action 1 合唱：学び→伝え・学び合う 歌詞を出し合い、合唱へ

テーマ：気候変動 それぞれの地域での気候変動

水不足・洪水・水の汚染・健康・安全

Action 2 劇づくり：多様な方法

テーマ：気候変動 それぞれの地域と地球での気候変動

3月のパリ地球子ども広場での子ども会議と表現活動へ向けて

学び → ショートストーリー → 劇化 → 合唱と劇づくり

③ 2019年3月 地球子ども広場パリ公演の実施に向けての確認

パリ会場までの移動計画、合同練習の日程と内容確認、公演当日の役割と動き

日程：2019年3月30日

場所：パリ日本文化会館 「地球子ども広場での大陸を越えた学び合いと公演」

④ 今後の予定 日本での国際シンポジウム (2019年6月) の概要の説明

1) 日本国際理解教育学会 2019

年6月 公開国際シンポジウム

テーマ：

大陸を越えた学びの場として地球子ども広場と多文化共生の学校・地域づくり

2) 東海ブロック国際理解教育研究大会 2019年11月国際教育交流とシンポジウム

テーマ：

多文化共生の心を育み、持続可能な社会づくりをめざした国際理解教育～「愛・地球」つなげよう学びの世界地図～

〈参考〉SDGsの目標(6)(13)+(11・15・17・10)

水と気候変動の問題は、世界的な規模での異常気象に現れているように、喫緊の課題として日々の生活に大きな影響を及ぼす事態となっている。国連持続可能な開発サミットで決められた2030年までのSDGs(持続可能な開発目標)の達成のために、具体的な教育を提起し、世界にメッセージを表出し、具体的な活動をしていく。

2.2 地球子ども広場パリ公演での実施内容

(1) パリ公演

「パリ地球子ども広場」を実施し、世界の水・気候変動問題に対して、子どもたちが創るパリ協定とも言える「パリ子ども宣言」をめざす。

地球子ども広場 Global Kids Square in PARIS

場所 地上階小ホール 入場無料

言語 日本語とフランス語

日時 2019年3月30日 16時～18時

共催 椋山女学園大学、パリ日本文化会館

協力 椋山女学園大学附属小学校、岡崎市立生平小学校

テアトルアカデミー名古屋校

名古屋市立蓬来小学校、名古屋市立猪子石中学校(日本)、

ル・クルーゼ学園 Le Creuset Plus (ブルキナファソ)、

Ecole Stoskopf à Strasbourg (フランス)

協賛 笹川日仏財団

2010年にブルキナファソへの椋山女学園大学附属小学校の机といすの支援交流から始まり、既にあったフランスとブルキナファソの交流に合流し、「大陸間水プロジェクト」として活動を本格化したプロジェクトの一環。

サイバー空間「地球子ども広場」上で「水と気候変動問題」に関してこれまで学んで来た成果を、日本、フランス、ブルキナファソ3か国の子どもたちが直接会い、各国の取り組みについて歌と身体表現や映像を取り入れた発表会と意見交換を行い、子どもたちのパリ宣言(子どもパリ協定)を創る。

(2) 組織・メンバー

大陸間水・気候変動教育プロジェクト 「地球子ども広場(GKS)プロジェクト」

地球子ども広場運営委員会：宇土泰寛・渡邊康・林敏博・岡崎ますみ

GKSプロジェクトリーダー：宇土泰寛

エデュケーションプロモーター：林敏博
 アートディレクター：ばんたくや
 コンポーザー（音楽・作曲）：渡邊康
 コーディネーター：岡崎ますみ
 映像制作：吉田裕亮国際文化交流協会

地球子ども広場参加者

- ・通訳：渡辺瑞加（立命館大学 学生、椋山女学園大学附属小学校・中学校・高等学校 卒業生）
- ・生徒：川口ひな、瀬木友茉（名古屋市立猪子石中学校3年生）
 戸塚世那、溝川怜香（テアトルアカデミー劇団中学3年）

フランス：大人1名 子ども5名、保護者も参加

ストラスブール市

Mr. Roisin Gilles Ecole Gustave Stoskopf à Strasbourg

ブルキナファソ：大人2名、子ども4名
 ワガドゥグー市

カトリーヌ・ザカネ（理事長）

Le Creuset Plus ル・クルーゼ学園

ジュール・ルワンガ（教員）

Le Creuset Plus ル・クルーゼ学園

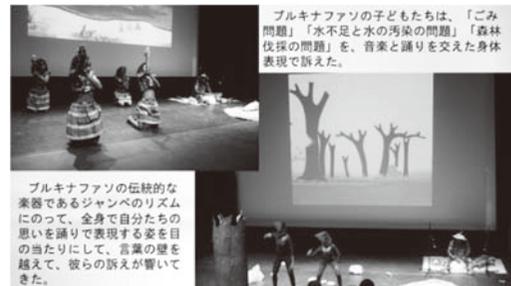
(3) 内容

地球子ども広場パリ公演は、2015年に第1ステージとして行った水をテーマにした音楽「I Love Water」での交流、2016年に第2ステージとして行ったミュージカル公演に続く第3ステージで、教育とアートをつなぐエデュテイメントとして、椋山女学園大学とパリ日本文化会館の共催で、笹川日仏財団からの助成を受けて行ったものである。

日本、フランス、ブルキナファソの子ども

たちが、これまで、それぞれ身近なところで水・気候変動の問題について学び、その学びを通して得た知識をもとに、課題を整理し解決策の提案も含めてミュージカル、歌や劇、影絵を使って表現した。

3か国の子どもたちの発表は以下の通りであった。



【ブルキナファソの子どもたちの発表】



【フランスの子どもたちの発表】



【3か国の子どもたちによる意見交換会の様子】

3か国の子どもたちによる発表の後、意見交換を行い、自分たちが住む地球を持続可能なものにするためには、全世界の子どもたちがそれぞれ学びを共有し合うことが大切であるということを確認し合い、世界の気候変動問題に対して「パリ子ども宣言」を発した。

「パリ子ども宣言」

自然がおこっています。

美しい地球を壊しているのは私たち人間です。

今こそ、地球への愛を取り戻すことが大切です。

そのためにここパリの地で私たちは地球子ども宣言をつくりました。

一つ、地球を汚したり壊したりするのをやめよう

一つ 地球温暖化を防ぎ、気候変動を止めよう

この2つのことを宇宙船地球号の仲間と協力して実行していくために、グローバルキッズスクエア (Global Kids Square) を世界に広げ、それぞれの地域と地球的課題の解決に取り組んでいくことをここに宣言します。

2019年3月30日 in Paris

3 栢山・環境と人間プロジェクト／SDGs 研究会

3.1 研究会の目的と経過

①研究会の目的

大陸を越えて、子どもたちが、自らの地域のSDGs、特に水・気候変動問題について

調べ、学び合い、呼びかけのメッセージを創り、様々な表現活動を通して、世界に向けてSDGsへの取り組みの重要性を訴える教育づくりを行った。

②研究会の開催

オープンな研究会として開催していく方針のもと、毎月、基本的には最終木曜日に、研究会を栢山女学園大学のEX棟207号室で行った。

第1回 6月14日

SDGsと市民性教育、租税教育と地域づくり

第2回 9月26日

東海ブロック大会に向けて、研究会定時開催に向けて

第3回 10月31日

ブラジル訪問報告、SDGsと水・気候変動教育

第4回 11月21日

東海ブロック大会シンポジウムに向けて

第5回 12月19日

マレーシア訪問報告、SDGsと市民性教育、租税教育

第6回 1月9日

フィリピンの水と教育問題の報告

③研究会メンバー

メンバーは、栢山人間学研究センターの環境と人間プロジェクト、大陸間教育プロジェクト「地球子ども広場 (Global Kids Square)」、国際理解教育学会名古屋チーム等のメンバーを中心として構成し、賛同者を増やしていった。

2019年度 栢山人間学研究センター「環境と人間プロジェクト」研究員

宇土泰寛、渡邊康、林敏博、山本典弘、

天野幸輔、中村眞子
 同研究協力者
 岡崎ますみ、井川和道、フレデリック・
 デュマバン、ばんたくや、上田敏博
 ☆椋山女学園大学教育学部と他学部の協力
 者・学生
 国際コミュニケーション学部など

球子ども広場と多文化共生の学
 校・地域づくり
 司 会：林 敏博（椋山女学園大学 客
 員教授）
 通 訳：フレデリック・デュマバン
 （Frederic DUMABIN）（フ
 ラ
 ンス）
 趣旨説明：宇土 泰寛（椋山女学園大学
 教授）
 合 唱：渡邊 康（椋山女学園大学 准
 教授）

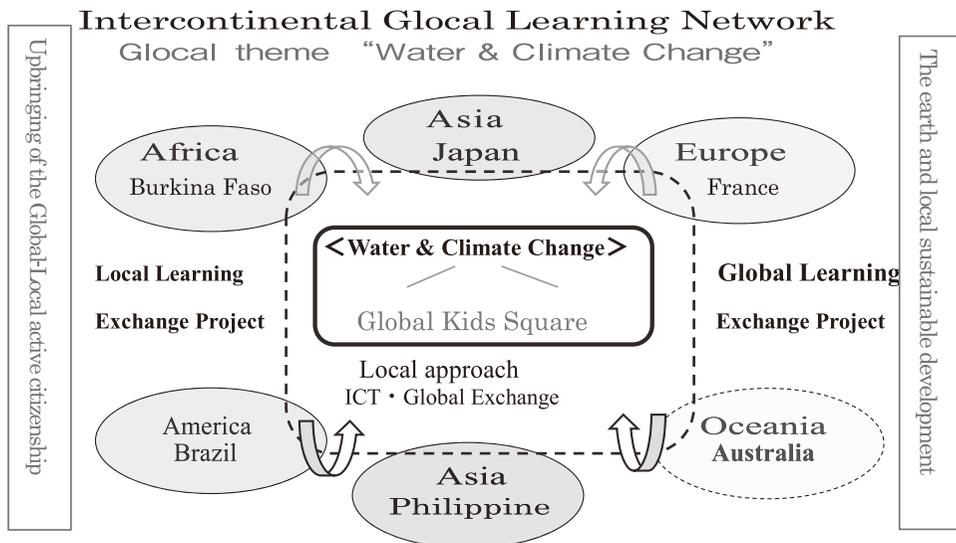
3.2 大陸間教育ネットワーク（Figure-1参
 照）

4 公開国際シンポジウム（日本国際理解教
 育学会第29回研究大会・椋山女学園大学）

4.1 概要

日 時 2019年6月15日 14:00～17:00
 場 所 椋山女学園大学星が丘キャンパス
 大学会館3階大講義室 Spirit
 テーマ 大陸を越えた学びの場としての地

パネリスト：
 フランス：クリスチャン・ガルチ
 （Christian GALZI）
 （ストラスブール市プライオリティ
 教育コーディネーター）
 ブルキナファソ：カトリーヌ・ザカネ
 （Catherine ZAKANE）



地球子ども広場への学びの成果の提出 日本語・英語・フランス語

Figure-1 Intercontinental Glocal Learning Network

(ル・クルーゼ学園理事長)

日 本：山本 典弘 (Norihiro
YAMAMOTO)

(愛知県岡崎市立生平小学校教頭)

4.2 公開国際シンポジウムのテーマと趣旨

シンポジウムテーマ：

大陸を越えた学びの場としての地球子ども
広場と多文化共生の学校・地域づくり

シンポジウムの趣旨：

世界は、大きな変革の時代を迎えている。かつて産業革命によって社会が一変したように、AI（人工知能）の進化は、超スマート社会をつくり出し、交通革命はカネ、モノ、情報だけではなく、ヒトの移動もボーダレスな状況を生み出し、ICTの進化は、大陸を越えた人々の交流も可能としてきている。そこでは、多様な国籍や文化背景を持つ人々が共に暮らす地域社会をつくと同時に、地域での人々の行為が地球システムにも影響し、かつて経験したことのない災害も引き起こしている。つまり、グローバル化と多文化化が同時に進行する地球時代がより進展しており、新しい宇宙船地球号の乗組員としての生き方が再度問われている。学びの場にいる様々な国籍や多様な文化を背負った子どもたちがいっしょになって、学校や地域、そして地球システムの問題に対し、大陸を越えてつながり合い、協働しながら行動するという新たな教育と、その実践としての「地球子ども広場 (Global Kids Square)」の意義が問われるのである。

4.3 パネリストの発表概要とシンポジウムの展開

1. パネリスト発表

1) クリスチャン・ガルチ 「フランスのSDGs教育と地域づくり」

多民族・多文化化がたいへん進んでいるフランス・ストラスブール市の紹介から始まり、そこでの子どもたちや家族、地域の問題、そして、これらの現状に関わるフランス政府のプライオリティ教育について、その歴史と主な都市や地域の説明があった。そのプライオリティ教育の具体的な実践として、自らが地域コーディネーターとして管轄している学校等の具体的な話があった。教育が子どもたちの将来を決めるという視点から、学校運営も学校関係者だけでなく地域の人々も参加して行われているなど多様な具体策が提示された。

2) カトリーヌ・ザカネ 「ブルキナファソのSDGs教育と地域づくり」

サハラ砂漠の南の内陸国ブルキナファソと学園の紹介から始まり、水問題での厳しい現状、その解決のためのプロジェクト活動と地域での実践を紹介した。特に、コムラ村での水問題と野菜作りなどによる社会の変化についての説明もあった。また、森林破壊、水質汚染、ビニール袋の汚染など、地域の行政の問題から生活のための森林伐採に至る厳しいアフリカの現状の訴えがあった。これらに対して、日本やフランスとの大陸を越えた連携活動として、現状を劇と音楽を融合して訴え、漫画を創って世界に知らせるなどの発表があった。

3) 山本 典弘 「日本のSDGs教育と地域づくり」

SDGsについての概略、日本や愛知のSDGs教育の説明から始まり、生平小学校

の「地域に働きかけ追究し続ける子どもの育成」について、SDGsを取り入れる前の実践と椛山女学園大学宇土ゼミの出前授業が契機となり、SDGsを取り入れた実践を紹介した。SDGs教育への関わり方は、子どもたちが「SDGs すごろく」をつくり、ダンスでの表現を実施するなど豊かな実践例の紹介があった。この活動を地域や多文化交流の中で自分事として捉え、世界のSDGsにつなげる実践への話があった。

2. 質問・協議

それぞれのパネリストへの実践等についての質問があった。今回の協議では、日本での多文化化のさらなる進展や世界的に反難民などのナショナリズムの動向もあり、フランスのプライオリティ教育への質問が多くあった。それに対して、ガルチ氏から、80か国以上の人々が居住している現状や母語の違い、一人一人に合った教育の可能性の探究として、学級の教師の増員、地域のNPOの活用など、日本の多文化共生の学校づくりに役立つ話があった。

3. 報告

林敏博 「地球子ども広場のパリ公演とパリ子ども宣言」

3か国の子どもたちが、それぞれの取り組みを発表し、学び合う場として、2019年3月30日に、パリ日本文化会館で、「地球子ども広場パリ公演 (Global Kids Square in PARIS)」を実施し、最後に「パリ子ども宣言」を発表したことの報告があった。

4. まとめ

渡邊康 合唱 「We Love The Earth」

大陸間水プロジェクト活動でのミュージカル公演 「I LOVE WATER ～人と水の精の物

語」のテーマ曲「I LOVE WATER」に続く、パリ公演でのテーマ曲の合唱曲が流された。

5. 東海ブロック国際理解教育研究大会「シンポジウム」から「SDGs」を考える 5.1 東海ブロック国際理解教育愛知大会の概要

2019（令和元）年11月23日（土）、椛山女学園大学教育学部及び大学会館で本研究大会を開催した。分科会・アトラクション・シンポジウムなどに愛知・岐阜・三重・静岡県より約180名が参加した。

研究大会主題：多文化共生の心を育み、持続可能な社会づくりをめざした国際理解教育—「愛・地球」つなげよう学びの世界地図—

今日の国際社会は、文化や生活を互いに尊重し認め合う多文化共生社会の時代となりました。しかしながら、世界各地では、貧困・飢餓、健康、教育、水、人権など、多くの課題も山積しています。また、地球温暖化、生物多様性、環境問題など、地球規模の課題を早急に解決しなければなりません。わたしたちは、持続可能な社会づくりをめざして、それぞれの地域において、身近なことから世界的な課題について、探究することができる子どもを育みたいと考えています。そのためには、異なる価値や文化でもお互いを認め合い、広い視野に立って意見を交流し、豊かな発想と創造する力を培い、自分事として課題を捉えることが大切です。

東海ブロック国際理解教育研究大会は愛知、静岡、岐阜、三重の4県の先生方が、多文化共生、外国語活動、在外教育施設・現地理解、SDGs及びESDについて実践発表を行った。また、シンポジウムでは、愛知県内の特色ある学校の実践を紹介するとともに、持続可能な社会づくりをめざした国際理解教育について、会場と意見の交流を深めた。



5.2 分科会・アトラクションの内容

(1) 分科会

- ① 分科会1 多文化共生・外国人児童生徒
- ② 分科会2 外国語教育・小学校英語教育実践
- ③ 分科会3 在外教育施設・現地理解
- ④ 分科会4 「愛・地球」SDGs・ESD

(2) アトラクション 岡崎市立生平小学校 4・5・6年生による表現（ダンスと歌）

本研究大会テーマ曲「We love the earth」作曲：渡邊康（椋山女学園大准教授）を岡崎市立生平小学校4・5・6年生、33名全員で表現（ダンスと歌）を披露した。生平小学校は、学校体育で実施している「リズムダンス」の全国大会において、3年連続で上位入賞（全国優勝1回、第2位2回）の実績を誇る全国を代表する学校である。子どもたちの柔らかく生き生きとした動き、また、弾けるような笑顔に、参観者の誰もが子どもたちに最大級の拍手を送った。この「We love the earth」は、今後、本会との交流が深いフランスやブルキナファソの学校においても「同じ曲」で表現を伝え合う大陸間交流につなげていく。

5.3 シンポジウム 大学会館 3階 大講義室 Spirit

テーマ 「愛・地球」つなげよう学びの世界地図

—SDGsでつむぐ「地域と教育」—

助言者 椋山女学園大学 教授

宇土泰寛（全海研副会長）

コーディネーター 椋山女学園大学 客員教授 林敏博（名古屋国際センター教育相談員）

パネリスト 岡崎市立生平小学校 教頭 山本典弘（大会長・大会実行委員長）

パネリスト 犬山市立東小学校 教諭 酒井俊輔（東小学校現職教育主任）

司会 瀬戸市立南山中学校 教諭 大澤周平（愛海研尾張地区事務局長）

第1部 「愛・地球」学びの世界地図 プロローグ（林）

地球子ども広場と大陸間教育交流
フランス・パリ講演報告（林）

第2部 SDGsでつむぐ「地域と教育」

- 学校教育における「SDGs」と「大陸間教育」（山本）

○ 岡崎市立生平小学校の実践から(山本)

○ 犬山市立東小学校の実践から(酒井)

質疑応答 (大澤)

助言 椋山女学園大学 教授 宇土 泰寛

地域と共に「創造」していくために、生物多様性・環境学習にSDGsの観点に迫る目標を意識した愛鳥活動やふるさと教育の実践に取り組む岡崎市立生平小学校の実践と環境・福祉・生産・国際理解など、幅広い分野でのESD教育活動を実践している犬山市立東小学校の実践をもとに、会場参加者との意見交流を通して、SDGs・ESD教育を中心としたシンポジウムを行った。また、こうした地域での学びを積み重ね「学びの世界地図」としてつなげるために、笹川日仏財団の助成を受けて、フランス・パリで開催した「パリ地球子ども広場」についても椋山女学園大学、林敏博客員教授が紹介を行った。

パネリスト：岡崎市立生平小学校 教頭

山本 典弘

岡崎市立生平小学校では、38年間継続している愛鳥活動を「SDGsの視点」から環境学習へ広げていった。児童の愛鳥活動のほかにも、保護者や地域の方々が一体となって、学校周辺の自然環境整備に力を注ぎ、学校内にあるビオトープ「ふるさと池」改修や広葉樹林の植樹など、「森を守ろう」(SDGs目標13)につながる活動や河川環境の調査から学びを深めるなど、地域の自然を「自分事」として捉えることができる児童を育てている。

パネリスト：犬山市立東小学校 教諭

酒井 俊輔

「ESDでつなぐ教育実践 ～世界から見

る日本～」というテーマで東小学校の3年生の環境の学習、4年生の福祉と高齢者の学習、5年生のお米から見る日本の学習、6年生の日本の歴史・文化と国際理解の学習を分りやすくまとめて提案した。また、ESDカレンダーの作成における学習での機能性や重要性について発表があり、参観者からもその有効性についても協議され、会場との意見交流も行われた。

シンポジウム助言 助言者：椋山女学園大学 教授 宇土 泰寛

東海ブロック国際理解教育研究会顧問、椋山女学園大学教授宇土泰寛氏からは、①次期学習指導要領における「主体的学び」「対話的学び」「深い学び」を踏まえた学習過程の質的改善、②地域へ、世界へ、大陸を越えてつながり合い、SDGsの内容でICTと英語とグローバル教育の推進、③大陸を越えて学び合うSDGs教育のねらい、愛知発！これからの「SDGs」について次のように助言した。

世界中では、SDGsの目標においてもそれぞれ課題があり、SDGsの重点ポイントが異なる。お互いの「自分事」を直接聞き合い、映像などで紹介し合う中で、お互いの自分事を生で聞き合うことにより、「大陸間教育」が深まっていくのではないかと。まずは地域から、そして、相手の地域を自分事として捉えて考えること。SDGsの広がりや「自分事」がキーワードとなる。

6 パリ子ども宣言を世界に広げる

2019年3月にフランスのパリで採択した「パリ子ども宣言」を世界に広め、地球的な課題解決に向けて協働して取り組む大陸間教

育活動の拡大と、現地の水・気候変動問題の現状と課題、課題解決に向けた取り組みを調査する活動を行った。

9月に、ブラジルを訪問し、SDGs教育のモビリティ・マネジメントに関わるクリチバ市を訪問、続いてサンパウロ日本人学校と現地校、リオデジャネイロ日本人学校と現地校を訪問し、講演を行った。さらに、世界的に注目されているアマゾン川の河口に位置するベレン市に行き、現地校や日系社会の中心になっている日系人協会や日系人の方々とお会いした。そして、日系の現地校である越知日伯学園と交流することになった。

10月には、マレーシアのペナン島を訪問し、ペナン日本人学校と梶山女学園大学の国際交流提携大学であるマレーシア科学大学を訪問した。また、ペナン島の歴史や現在の問題を調査した。

6.1 ブラジル訪問

《目的》

- (1) SDGsのための教育プロジェクトにおける都市計画や地域づくりの事前調査
- (2) 水・気候変動教育やモビリティ・マネジメント教育と租税教育に関わる教育内容の日本人学校及び現地校での実施の可能性と大陸を超えた実践交流のための事前協議（サンパウロ、リオデジャネイロ、ベレンの日本人学校及び現地校を訪問）
- (3) 外国人児童生徒教育に生かすためのブラジル日系移民の歴史の調査研究（クリチバ、サンパウロ、ベレンの日伯協会、日伯援護協会を訪問）

《訪問の概要》

- 1) クリチバ訪問 目的 (1)、(3)



クリチバでは、SDGsのための教育プロジェクトにおける都市計画や地域づくりの事前調査と、外国人児童生徒教育に生かすためのブラジル日系移民の歴史の調査研究を行った。

クリチバ日系協会を訪問し、副事務局長の大島さんにお話を伺った。最近クリチバも気温の変化が激しくなってきたが、地球温暖化のことは40年前から言われていた。クリチバに交通バスカードシステムを導入したのは、クリチバ市の初の日系人市長となったカシオ谷口氏であるということであった。ま





た、以前はクリチバには日系人は少なかったが、今では約15,000家族、60,000人ほど生活しており、ブラジルではサンパウロについて2番目に多い。ここにはパラナ大学という良い大学があるので日系人が集まってきたということがわかった。

2) サンパウロ訪問 目的 (1)、(2)、(3)

サンパウロでは、水・気候変動教育やモビリティ・マネジメント教育と租税教育に関わる教育内容の日本人学校及び現地校での実施の可能性と大陸を超えた実践交流のための事前協議を行った。

下の写真のように、サンパウロでもBRTシステムが導入されているが、広大なサンパウロ市内全域をカバーするには至っていない。大都市サンパウロには高層ビル群とファベラが混在している。高層ビルに住む人は公共交通機関は利用せずに、自家用車を複数所有している。



「水・気候変動教育」をテーマに、これまで行ってきた大陸間教育活動について講話した。子どもたちにはブラジルで生活する機会を持つことができたことを生かして、ブラジルではどんなことが起こっているのかに興味関心を持って生活することの大切さを伝えた。子どもたちはとても興味深そうに聞いていた。

先生方とはグローバル人材育成の拠点としての日本人学校の役割と今後の活動のあり方について討議する機会を得た。

続いて、現地校の教育の様子を視察するために、カトリック教系の私立の学校である





Escola Batista de Educação Integral (EBEI) 校を訪問した。

外国人児童生徒教育に生かすための、ブラジル日系移民の歴史の調査研究のため、サンパウロにある日系移民博物館を訪問した。



3) リオデジャネイロ訪問 目的 (1)、(2)

リオデジャネイロ日本人学校を訪問し、「水・気候変動教育」をテーマに、これまで行ってきた大陸間教育活動について講話した。サンパウロ日本人学校に比べると小学部11名、中学部2名で、児童生徒数も少ない小規模校であったが、その特性を生かして、少人数学習でわかる授業の展開を目指していた。この学校でも、子どもたちはとても興味深そうに聞いていた。

リオデジャネイロでも、左の写真のように、リオ・オリンピックに合わせて、市内を走るトラムが作られたが、リオの市内を網羅



するには至っておらず、利用者も多くない。車への依存度は増すばかりで、市内のいたるところで常に交通渋滞が起こっている。

4) ベレン訪問 目的 (1)、(2)、(3)

ベレン市は、南緯1度27分、赤道直下の



アマゾン川流域にある都市である。私たちがベレン市を訪れたとき、日系移民90周年式典がちょうど1週間前の9月13日に行われたばかりであった。

90年前に、このアマゾンの地に移住してきた日本人は、トメアスという村に入り、熱帯林を切り倒して農地をつくり、作物を植えた。しかし、作物は育つことはなく多くの人々がマラリアに倒れ亡くなっていき、この地を離れていった人も多い。今ここで生活している日系人の人々はここまでたいへん苦勞してこられたということを汎アマゾニア日伯協会で、資料等を見せてもらいながら聞くことができた。

越知日伯学園は、越知恭子学園長が設立した日系の私立学校で、幼稚園、小学校、中学校があった。学園の運営方針は、モンテッソーリ教育法により子どもの独立と自立を目指している。ポリグロット（多言語）教育法を取り入れ、異文化教育も行い豊かな人間性を身



に付け、平和を愛し地球規模で生活できる国際人の育成を目指していた。これは、私たちが行っている大陸間教育活動のねらいと一致するもので、これからは連携して活動していくこととなった。

6.2 ペナン訪問

租税教育においては、租税の役割としくみの学習が小学校段階においても指導内容として明記され、小学校6年生の社会科においては、従来の歴史学習より先に学ぶように改訂されている。そこでは、自然災害や公共交通、多文化共生などSDGsの目標を実現するための地域づくり、街づくり、そして、持続可能な地球社会づくりへの社会参画が重視されている。また、世界中には、グローバル化の進展の中で、地球的課題への対応として炭素税など新たな税制も国際的な広がりを持っており、租税教育の国際化も求められている。さらに、世界中の日本人学校では、日本の教育に沿って学んでいる子どもたちがたくさんおり、海外での教育展開も重要な課題になっている。

このような新しい課題を探究するために、「SDGsと租税教育研究会」を立ち上げ、今回、上記の問題意識のもと、マレーシアのペナンを税理士会の方と一っしょに訪問し、生徒向けに授業を行った。

《目的》

- (1) SDGsのための教育プロジェクトにおける都市計画や地域づくりの事前調査と租税教育の海外での教育展開（今回はSDGsと租税教育を結びつけて授業を行う初めての試み）
- (2) 水・気候変動教育やモビリティ・マネ

ジメント教育と租税教育に関わる教育内容の日本人学校及び現地校での実施の可能性と大陸を超えた実践交流のための事前協議（ペナン日本人学校及び現地校との連携の可能性を探る）

《訪問の概要》

1. ペナン日本人学校訪問 目的 (1)、(2)



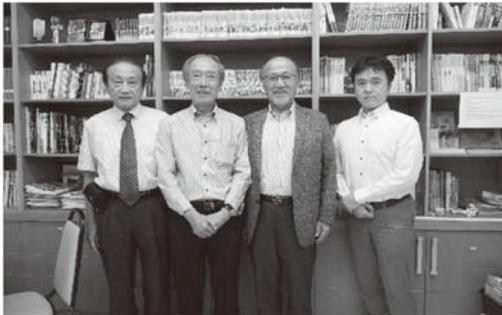
ペナン日本人学校の5、6年生の児童を対象に、「多文化共生時代のSDGsと租税教育」をテーマに授業を行った。

SDGsと租税教育を結びつけて授業を行う初めての試みであったが、日本人学校の先生方からも好評で、参加児童からたくさんの質問もあり、とてもよい成果が得られたと感じた。

訪問後に、日本人学校の先生と個別に話をする機会を持ち、今後の学校教育目標を水・気候変動をテーマとしたSDGsの教育展開の方向にしていくための相談を受け、来年度以降ペナン日本人学校としても少しずつ教育実践を行っていきたいということであったため、今後もサポートを続けていきたいと考えている。

2. マレーシア科学大学訪問

マレーシア科学大学（Universiti Sains Malaysia：USM）は、梶山女学園大学の国際交流提携大学で、大学の構内には、株式会



社東レの援助により、日本文化センター (Japanese Cultural Centre : JCC) がつくられている。そのセンターは、

- (1) マレーシアにおいて日本語・日本の文化を広めること
- (2) マレーシアの文化を日本に紹介することを通してマレーシアと日本との相互交流を深めること
- (3) 日本とマレーシアの文化に精通したグ

ローバルな人材を育成することの3つの目標があり、マレーシアと日本の架け橋の役割を担っている。

今回のペナン訪問では、そのセンター長を務めている副田雅紀氏と会い、ペナンの現地校と水・気候変動教育やモビリティ・マネジメント教育を連携して行うことの可能性について相談した。副田氏は大学の近くにあるハンチャン・ハイスクールをはじめ、多くの現地校とのつながりもあり、学校の校長先生方に説明をして連携の可否を聞いていただくように依頼した。

7 西山っ子地球子ども広場から梶山地球子ども広場へ

7.1 西山っ子地球子ども広場

〈場所〉 アーバンラフレ虹ヶ丘中団地

〈時間〉 2015年5月～2019年5月

〈目的〉 自分の住む町をジオラマで実際に作ったり、動かしたり、役になりきったりする活動を通して、想像力を働かせ、世界に興味をもつなどの知的な活動を行うことができる空間をつくる。水・気候変動問題とモビリティ・マネジメント、町づくりなどSDGsの課題と関わりながら、活動を展開する。

2015年5月以来、4年間にわたって続けてきたUR都市機構の虹ヶ丘中団地での西山っ子地球子ども広場も、URと大学の提携期間終了のために、ついに、5年目を迎えた2019年5月16日(木)に最終回とせざるを得なかった。

水・気候変動問題とモビリティ・マネジメント教育をつなげ、英会話を活用し、物語化を図るなど、プロジェクト活動につなげるこ



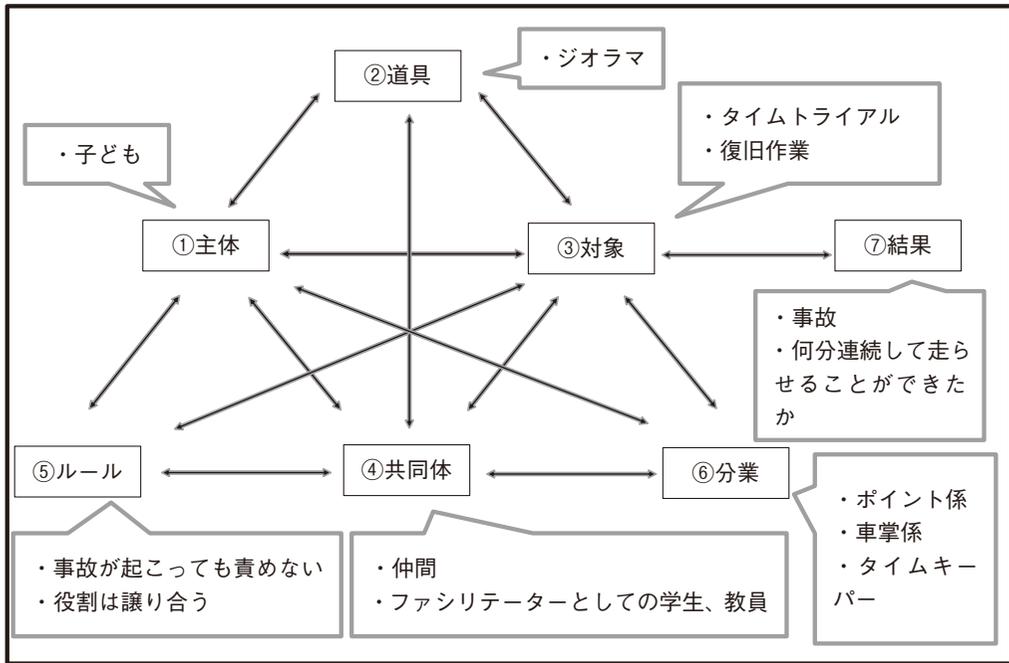
をめざした。宇土ゼミの4年生を中心に、他のゼミのメンバーも加わり、3年生のメンバーやプロジェクトに関心のある2年生、他学部のメンバーなどが参加して実施してきた。

最終回には、小学生のころ参加した子も中学生になり、幼稚園児だった子が小学生になっており、この4年間の中で、大きく成長した子たちも参加してくれた。

そして、2015年の最初は、プラレールの線路をつなぐだけの簡単な町しかなかったジオラマが、どんどん成長し、東海地方をよりリアルに表したジオラマへと発展したのである。このジオラマを通じた活動の中で、大きなジオラマの電車などを動かすには協力が必要であることに気づき、一人一人の子が学ぶと同時に、協力的な活動から生まれるコミュニケーションや認識の拡大や俯瞰的な視点、学びのコミュニティの生成、そこでのルールの発生、問題解決のための振り返る内省力、解決策の提言など、多くの資質形成ができた。そこで、これらの学びから生まれる過程を考察し、その中にしかける多様な要素や項目を考えたとき、さらなる学びとなる物語化や多言語化が生まれたのである。

これらは、エンゲストロームの拡張的学習理論やレイブとウェンガーの正統的周辺参加理論などにも通じる学びの発生であった。

この西山っ子地球子ども広場の活動は、宇土ゼミの学生を中心に4年間実施してきた活動であり、今までのゼミで積み上げてきた分析、考察をもとに、最終年度になった2019年の宇土ゼミの大林千紗は、幼稚園児から小学生になった児童A子の4年間の行為に注目し、特に“役割”と“対話”に着目して児童Aの居場所形成における成長と所属意識を高めた転換点を追っていった。そして、エンゲストロームの活動理論と対比しながら、西山っ子地球子ども広場活動理論を次の図のように考えたのである。



図：西山っ子地球子ども広場活動理論

7.2 梶山地球子ども広場

団地からの撤去作業を5月20日に実施した。これは子どもたちには一切公表しておらず、ゼミ生とプロジェクトメンバーで、ジオラマを分解し、車に積む作業をしていたら、子どもたちが集まって来て、何にもなくなった部屋に入り、「本当に、楽しかったな」とつぶやき、床に落ちていたジオラマの山の部品を手にとって、まるで宝物のように、「これ持って行っていい」と言うのである。ごみにしか見えないような小さな部品だったが、「いいよ」と言って、車でお別れをした時も、車が見えなくなるまで、手を振ってくれたのである。本当に、子どもたちの居場所にもなっていたのだと、新たな感銘を受けながら大学に帰ってきた。

このジオラマは、場所を取るのので、壊すの

はもったいないと思いつつも、どうしようと思案しているとき、環境と人間プロジェクトで、EX棟の部屋を利用できないかと検討し、人間学研究センターの甲斐センター長に話をし、207号室を借りることができた。そのおかげで、ジオラマは半分の大きさになったものの、新しい部屋に設置し、ジオラマ活動



を継続できることになった。

そして、8月から、椛山こども園の園児たちが来て、新たな学び合いの活動が始まった。このジオラマプロジェクトには、宇土ゼミ生だけではなく、教育学部の3年生、2年生も関わり、国際コミュニケーション学部の学生など幅広いメンバーが関わってくれた。その様子は椛山女学園大学のホームページに掲載された。

こども園の園児がジオラマを通して地球環境とモビリティマネジメント(交通環境)を学ぶ

11月22日(金)、星が丘キャンパスに隣接し今年度開園した椛山女学園大学附属椛山こども園の園児が教育学部の宇土泰寛教授を訪問し、2つのジオラマを見学しました。これらのジオラマは宇土教授と教育学部の学生有志が中心となり作成。山から流れた水が川になり、やがて海に注ぐまでを再現しており、途中の街には名古屋城、新幹線、リニア新幹線、中部国際空港はもちろんのこと、フランスやブラジルなどの外国も作られています。

子どもたちは大雨による崖崩れがあつてはいけないと斜面にフェンスを張ることや万が一に備えて病院やドクターヘリを配置する場所について提案。また列車同士が衝突しないようにレールポイントを巧みに操作していました。

子どもたちは時間が過ぎるのを忘れていつまでも夢中になっていました。

このジオラマを通した大陸間SDGs教育

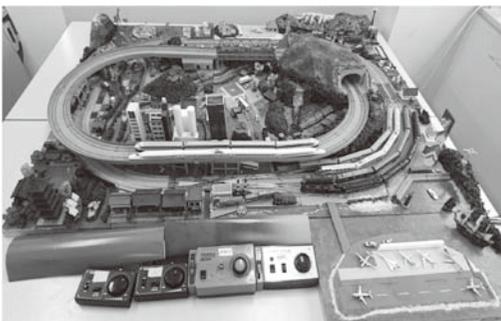
プロジェクトは、宇土教授を中心に、フランス、アフリカ、ブラジルとつながっており、言葉の壁を低くしているのが、幼児でも、外国人児童でも学べる新しい学びの方法なのです。こども園の子どもたちは、8月以来、3回目の挑戦で、すばらしい認知力と協力性、コミュニケーション力の伸びが見られています。こども園の先生方と大学でより連携して、このプロジェクト型の学び合いを継続していきたいと話合っています。



ジオラマを通した活動で、幼児から低学年児童用の「プラレールを使ったジオラマ」と小学校中学年以上を対象にした「Nゲージを使ったジオラマ」を制作した。ジオラマには、



プラレールを使ったジオラマ



Nゲージを使ったジオラマ

様々な学びのしかけを作っており、この全体の構想としかけ、学びのしかけの意義と解説を宇土が担当し、ジオラマ本体の制作を渋谷純一が担当した。

この活動は、SDGs教育など、新たな教育の課題になっているテーマを学習するときどのような方法があるかと言う実験的な試みでもある。これからの学びを考えたとき、多様な子どもたちが共に学ぶ方法としてテキスト型からコンテキスト型の学び合いへと言う発想を重視していく必要がある。その時、言語コードを削減する方法として具体物でよりリアルな社会を提示し、その運営操作で、社会参画を促す市民性教育の一環でもある。言語コードを下げる学び合いの場により、Nゲージを使ったジオラマにも、こども園の園児た

ちもたいへん関心を示したのである。

異年齢の子どもたち、日本語がまだ十分話せない外国からの子どもたち、特別支援の子どもたち、そして、大陸を越えて学び合う地球子ども広場の子どもたちの学び合いなど、多文化共生社会のインクルーシブな教育への応用など、多様なアプローチの一つとしての可能性を持っているのである



ジオラマの活動を見るこども園の園児たち

さらに、このジオラマのパートにQRコードを付けて、そこをスマートフォンで検索するとそのパートの説明や物語が出てくる計画を学生たちと考えており、今年度は、そのコンテンツを作る活動を行った。そのために、パーツごとを写真に撮り、その学びのしかけの内容を調べ、物語などにするのである。その活動を通して、ジオラマの物語化→絵本・インスタグラム→多言語化 ⇒広報へと展開していくのである。実際に、眉山こども園の園児たちについても、豪雨災害で電車の事故が発生し、ドクターヘリが出動することになった時に、ドクターヘリを絵にして学びを深めたのである。

8 出前授業

8.1 出前授業の経緯

水・気候変動教育のプログラム開発とその実践をめざした地域の学校との連携事業として、2017年度から岡崎市立生平小学校への出前授業を実施している。

1年目の2017年度は、アサヒ飲料（株）との協働プロジェクトによる水の循環をテーマにした小学校での実践を実施した。

この研究開発は、宇土ゼミの学生とアサヒ飲料の担当者と毎月研究協議を重ねてできあがったものである。

2017年12月19日（火）9:35～11:25に、生平小学校体育館で、3年生から5年生までの合計30名の児童への授業であった。

この出前授業は、「三ツ矢サイダー」出前授業プログラム～水と森の関係を探る 安全でおいしい水ができるまで～（相山女学園大学版）で、タイトルと内容は、「水と森の物語」で、「私たちの生活に必要な不可欠な水。水はどのようにして生まれ、どのように活用されているのだろうか。ジオラマや紙芝居を教材として水循環のしくみをわかりやすく学びながら、水の価値、環境保全の大切さについて学ぶ。また、ゲーム形式で水の大切さに気づき、他の国が考える水の価値についても学び、「私たちが、今、できること、をテーマに子どもたちが考え、発表する。」というものであった。このプログラムの理論的構成は、宇土の4つの側面論を用いて、

情意的側面：「えこるん」と「にこるん」のファンタジーによる水の物語

認知的側面：ろ過装置での実験と観察
科学的認知による体験的理解

ブルキナファソの映像

山や地形など自然環境と世界への認知的拡大

価値的側面：世界の水の使用量と自分の水の使用量との視覚的な比較と自らへの問い

技能的側面：すごろくに描かれている水への態度や技能をゲームをしながら学ぶ

2年目の2018年度は、宇土ゼミを中心とした大陸間水・気候変動教育プロジェクトのパートIIの活動として、世界的にも問題になり、SDGs教育でも主テーマである「気候変動問題」を加えて、10月22日（月）に実施した。

2017年度のパートIは、平常時の日常生活での水の循環の物語であり、水の循環、水のろ過実験、映像、すごろくをキーワードにした「水と森の物語」であったのに対して、2018年度は、平常時に対して、気候変動による異常気象を題材にした「日本と世界の異常気象の物語」である。ここでは、熱による対流と土砂崩れ実験を取り入れ、価値的側面では、4つのコーナーを、技能的側面では、すごろくにより、異常気象時の行動の仕方や判断を題材にしている。

8.2 2019年度の出前授業

3年目の今年度（2019年度）は、パートIIIとして、個人の行為と地球システムの相互関係を課題にして、プログラム開発を行った。つまり、個人や地域での活動が、地球全体に影響し、地球システム自体が気候危機として出現し、今度は地域や個人に対して、大洪水

や異常気象として現れるというこの危機の循環である。

2019年度 テーマ：100年後の地球の物語

- 1) 目的 出前交流授業を通して、将来の地球環境について学び、生平の自然や環境について考え「今、自分たちができること」について考えを持つことができるようにする。
- 2) テーマ 100年後の地球の物語
～未来の地球を守るのはわたしたちだ！今一人ひとりにできることを考えよう～
- 3) 日時 2020年1月28日（火）
10：35～12：10 3, 4限
- 4) 場所 岡崎市立生平小学校 体育館
岡崎市生平町字鶉場25-1
- 5) 参加者 椙山女学園大学教育学部宇土ゼミ 9名（4年8名、2年1名）
引率 同大学 教授 宇土泰寛、准教授 渡邊康、客員教授 林敏博
- 6) 対象 全学年（1・2年生は3限のみ。）
- 7) 授業内容（概要）

時間 (分)	経過 時間 (分)	内容		担当者
5	5	開会式	校長先生挨拶 自己紹介 ・学生、教授紹介	関谷
5	10	プロローグ	「かんきょうってなんだろう？」 生活科を交えて環境とは何かを知らせる。	大林 中川
15	25	情意的側面 物語	「100年後の地球の姿」 地球温暖化が進行し続けると100年後の地球はどうなってしまうのかを実際の予測を基に物語を作成。劇と映像を融合し情意的に訴える。	大林 中川

15	40	認知的側面 実験①②	「ろ過できない汚れてなんだろう」 ろ過装置を使い、水溶液の中でも、ろ過できないものがあることを知る。	延谷 額 関谷
		認知的側面 実験③	「目の前の汚れが世界に！魚や鳥はどうなってしまうのだろう」 1か所でも海が汚れると、世界全体に汚れが広がることを知る。	延谷 額 関谷
10	50	休 憩		
20	70	価値的側面 道徳	「地球を救おう子ども会議」 オリジナルの副読本を用いて生平小学校の未来を想像し、今自分たちにできることを考える。	角南 大島
15	85	技能的側面 すごろく	「100年後に届け！生平小学校2020年の木」 すごろくを通して自分自身は地球のために何をするのか考え、実際に行動するきっかけとなるよう発信する。	竹内
5	90	エピローグ	まとめ ・児童がこの授業で学んだことや感想などを発表する。	大島

8) 授業内容

プロローグ「かんきょうってなんだろう？」
情意的側面「100年後の地球の姿」

【目的】

- ① 「かんきょうってなんだろう？」
人的環境、物的環境、自然環境、社会環境といった身の回りのものすべてが環境であることが分かる。
- ② 「100年後の地球の姿」
目的1：私たちが普段使っているものや行っていることが、100年後の未来に影響を及ぼしていることを知る。
目的2：地球温暖化が進むと、100年後の地球はどうなってしまうのかを一人一人が考える。
目的3：未来に悪影響を与えないために今、私たち一人一人ができること

を考える。

【内容】

《「かんきょうってなんだろう？」》

身近な具体例を用い、環境とは何かを知る。生平小学校の周りの環境や学校内の環境を写真を見ながら改めて知る。

《「100年後の地球の姿」》

場面1 ①～③ 劇

しゅり・あおと・げんきは、100年後の未来からやってきた「ましろ」からのSOSの発信を受けて、実際にどのような状況になっているのか興味を持ち、100年後に行き現状を知る。

場面2 ①～場面3 ② クロマキー

100年後の地球が、地球温暖化の影響によって様々な面が変わってしまっている現実を目の当たりにする。100年後の未来が明るい未来であるように今、私たち一人一人ができることを考える。

場面4 ①～③ クロマキー

実際に100年後の未来で授業を受けてみて、2020年では当たり前だと思っていたことが、100年後の2120年では当たり前ではないギャップを感じる。

場面4 ④ 劇

実際に100年後の授業を受けてみて、海が黒い原因について実験を交えて学ぶ。

8.3 生平小学校の先生からのまとめ

椋山女学園大学の学生による環境出前授業（宇土ゼミ）を実施して学びを深めることができた。本年度の出前授業では、「情意・認知・価値・技能」による4つの側面論（宇土）による「100年後の地球の物語」をテーマとして出前授業を行った。「情意的側面」では

クロマキー手法と寸劇による「100年後の地球」について、「認知的側面」では水のろ過実験を観察、「価値的側面」では、道徳「地球を救おう子ども会議」の資料を基に縦割りグループで話し合った。最後に「技能的側面」では、「100年後に届け！生平小2020年の木」と題してSDGsスゴロクをもとに学び合い、葉の形をした画用紙に記して2020年の木に掲示して自分で宣言をするという内容で締めくくった。

これらの活動を振り返ると、地球規模の開発目標として提唱されているSDGsにおいても、一人一人の小さな行動が、やがて世界へとつながることを意識して学習をさせることが大切であると考えられる。



おわりに

環境と人間の関係が、今ほど問われていることはない。人類誕生以来、人類は地球の環境と共に生きてきた。そこには、氷期の極めて厳しい状況もあり、間氷期の暖かな時期もあった。この自然のサイクルの中で、地球上の生き物は何千年、何万年もかけて、適応し、最後に、ホモサピエンスである現生人類が生き延びてきている。

私たち、現生人類は、狩猟社会から、農業社会へ、そして、産業革命を経て、工業社会へ、そして、現在の情報社会へと進み、さらに、Society 5.0と言われる新たな社会を迎えようとしている。

しかし、地球は、一人の人間にとっては、あまりにも大きく、地球上で生活しながらも、地球自体を意識することはなかった。しかし、1700年代後半から1800年代前半にイギリスで起こった産業革命は、従来の社会生活を一変させることになった。あらゆることを手や家畜を使って作業してきた人々の生活が、蒸気機関の発明により一変した。交通機関も一気に変わった。車社会が出現し、蒸気船によって、大陸間の移動も可能となった。

この産業革命は、人類にとって便利になった生活を享受すると同時に、地球温暖化の原



因となる二酸化炭素の排出量を一気に増大させた。

そして、近年、日本はもちろん世界中で、異常気象が引き起こされている。オーストラリアで、現在起こっている広大な範囲の森林火災や砂嵐、雨が降り出すと一気に降り、洪水を引き起こしているように、極端化している。

環境と人間の相互関係が、世界的には、気候危機と言われるほど緊迫した事態になっている。このような課題に対して、人類は1960年代、アポロ計画により、地球の姿を初めて見て、宇宙に浮かぶ青い惑星、地球の姿を見た。そして、地球のあり方を問い直す「宇宙船地球号」の概念を提起した。

その主な人物は、経済学者のケネス・E・ボールディング (Kenneth E. Boulding) と建築家であり、思想家のバックミンスター・フラウ (R. Buckminster Fuller) である。ボールディングは、1965年に「宇宙船としての地球 (Earth as a Space ship)」を書き、1966年にワシントンで開かれた未来資源研究所で、「来るべき宇宙船地球号の経済学 (The Economics of Coming Spaceship Earth)」という論文を発表し、「カウボーイ経済」から「宇宙飛行士経済」への転換を提起したのである。バックミンスター・フラウは、『宇宙船地球号 操縦マニュアル (Operating Manual for Spaceship Earth)』において、化石燃料や原子力エネルギーに依存することへの警告とエネルギー供給母船「太陽号」などのクリーンエネルギーへの移行を提示した。

それから半世紀たった今、国家中心の発想からグローバルガバナンスとして、SDGs (持

持続可能な開発目標）を決め、2030年までに、誰一人取り残さない地球社会を創ろうとしているのである。

大陸間SDGs教育研究は、まさにこの世界の動きと同調したものであり、椋山人間学研究センターの環境と人間プロジェクトは、EX棟の207号室をベースに、こども園から小学校、中高等学校、大学、大学院のあらゆる段階の教育と連携しながら、この地球的課題であり地域的課題に立ち向かおうとしているのである。この活動は、アジアの日本、アフリカのブルキナファソ、ヨーロッパのフランスの3つの大陸を越え、つながり合う活動であったが、今年度は、今回の報告にあったように、南アメリカ大陸のブラジル、アジアのフィリピンとマレーシアと拡大してきている。国内の学校からも問い合わせや相談が来ている。個人的にも、活動への参加が増えており、さらに、海外と関係した方の参加もみられる。

幼児教育から大学まで、多様な教育アプローチを研究開発し、さらに、世界に発信していきたい。そのためにも、豊かな人材を抱える椋山女学園大学及び椋山女学園の各学校の教職員の力をつなげていくことも必要と考える。

今年度の活動を振り返り、多くの方々の理解と協力をいただき、ここまでやって来ることができたと言える。そして、椋山人間学研究センターのプロジェクトとして活動できたのは、大きな支えになった。

また、椋山女学園はじめ、笹川日仏財団、パリ日本文化会館、日本税理士会連合会、アサヒ飲料（株）など、これらの活動に関して理解と協力をしていただき、深く感謝申し上げます。

特に、笹川日仏財団からは、「パリ子ども宣言」を作ったパリ公演の実施に当たってのご支援をいただいた。日本税理士会連合会からは、大陸間SDGs教育研究活動の一環としての租税教育に関係したフランス、ブルキナファソから日本に招聘した2人の渡航費やブラジル、マレーシアの日本人学校や現地校を訪問し、パリ子ども宣言の交流拡大をより進めるための費用をいただいた。椋山人間学研究センターの環境と人間プロジェクト予算から、北海道の全海研全国大会参加と地球子ども広場の活動運営に役立たせていただいた。ほかにも、これらの活動を継続するために、椋山女学園大学の学園研Bなど多くの支援のもとに、活動が継続し、拡大していることに感謝申し上げます。